優しい子守歌の歌い方

橙々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
優しい子守歌の歌い方

【Ｎコード】
Ｎ５９７３Ａ

【作者名】
橙々

【あらすじ】
私は羊と一緒に眠れない夜を過ごしていました。そこに突然、彼は真夜中に現れたのです。

1＊真夜中、突然の来訪者

真夜中、突然の来訪者

ちょうど羊を数え始めて四桁にさしかかった時、家のチャイムが鳴った。
こんな夜中に誰だろう。

「…ん～、どなた様ですかぁ？」

ズルズルと毛布を引きずり、不審に思いながら覗き穴に背伸びをした。
そこからチャイムを鳴らした犯人を見る。

「……時任くん？」

丸いガラス穴越しから見えたのは、大学の同級生だった。
何だって、仲良くもない彼がこんな夜更けに私の家に用事があるんだろう？

「あ、あの！実は朝依さんに折り入ってお話がありまして…」

「こんな夜中にですか？」

何だ、この男は。夜中に女性の部屋に用事があるだと？
何考えてんだか…。

首を傾げながら、扉越しに会話を続けた。

「はい、朝依さんにどうしてもお渡ししたいものがあって。…ドアを開けては頂けませんか？」

「…そんな事言われても…」

いくらなんでも、そんな事は出来ない相談だ。
こちとら色気はないとはいえ、一応一人暮らしの自称若い乙女なのである。

「このままじゃいけないんですか？」

「それではダメなんです。渡したいものもありますし…」

「…渡したいものですか？」

遠まわしに拒否してみるが、全然効いていない。
逆に真剣な彼の物言いに私が話を聞き始めてしまってる。

「そうです、渡さなきゃいけない物があるんですよ。府宮さんから頼まれてしまって…」

「晴海からですか？」

時任くんから見知った名前を聞いて、思わず驚いて声を上げた。
府宮といえば、私の大親友の名前じゃないか。
何で、時任くんから？

「……えっと、それには理由がありまして…」

「理由？」

「えっと、府宮さんとは同じ研究室でよく話したりしていてですね。…それで…っくしゅっ！」

何故かしどろもどろに答えていた彼が小さくクシャミをしたのが聞こえた。
そういえば今は春になりかけになってるとはいえ、夜中はまだ肌寒い。
自分は毛布を頭から被っていたから気づかなかったけれど…。

「…あ、あの…」

「っくしゅ！…ひゃい、何ですか？」

ズズッと鼻をすする音も聞こえてきたので、ますます申し訳なくなってしまった。
何で、私がこんな気持ちにならないといけないのかな。

「……とりあえず、風邪ひいちゃうかもなので中にどうぞ…」

ガチャリと鍵を外してドアを開く。
そこには、黒髪黒縁メガネの時任くんが鼻を赤くさせながら立っていた。

「すいません、お邪魔します」

彼は人の良さそうな笑顔を浮かべて、申し訳なさそうに笑う。

「いいえ、晴海から何か頼まれたみたいだから」

彼が部屋に上がったのを確認して、ドアを閉める。
それから、頭から被っていた毛布をとってボサボサ頭を素早く直した。

「……何だって、こんな事になったんだか…」

いきなりの来訪者に玄関で小さく溜め息を吐いたのは言うまでもないのだけど。

さて、コーヒーとお茶どっちを用意しましょうか。

来た時と同じく、ズルズルと毛布を引きずって来訪者をもてなすべく台所へと向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5973a/

優しい子守歌の歌い方

2010年10月28日08時13分発行